



# 日本 ハンザキ研 究所 ニュ - ス 2010(11) : 通巻 No.59

発行 2010年11月30日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel / Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

## 黒川ダイコン

ダイコンの美味しい季節になりました。私も校庭の花壇に“辛味ダイコン”の種を蒔いて収穫を楽しみにしています。間引きをした時に試食したのがなかなか辛くて満足しました。去年は事務局長さんが「シカにダイコンの葉だけでなく大根そのものも食べられてしまった」と嘆いていた。校庭に4日と10日にシカに侵入されたが、私のダイコンは無事だった。食われたのはリンゴ、キュウイ、ヨモギ、アザミ、イタドリなどである。ネコヤナギもセキショウも食われていなかった。シカの好き嫌いが分かるが、校庭の外ではえり好みなどしてられない現状になっているようだ。生野のシカは痩せていて旨くないので、猟師も相手にしないと言われている。



3000本のダイコン売り尽くし作戦

ハンザキ研のすぐ近くに、何も作物を作らないながら、いつでも使えるように整備されていた畑がある。今年、若い人たちがダイコンを植え付けた。害獣対策のネットも何度かシカにクリヤーされたそうだが、無事に収穫の時期を迎えた。“ダイコン引き”イベントが行われている。黒川ダイコンは柔らかく美味しいし、辛味大根も辛くて美味しい。神戸大学のサイエンス・ツアーの皆さんに紹介したら何本ものダイコンを抱えたお母さんたちが大喜びでバスに乗り込んでいた。自分で引き抜いたダイコンの味は更に美味しかったことでしょう。ダイコンの葉を初めて見て、食べ方を教えてもらった方もいたという。しかし、先日、ネズミに齧られたダイコンを見せられた。今年は山の生り物が大不作だと言うことを目の前に突きつけられた感がある。小動物たちはこの冬を越せるのだろうか？





写真 1 猪の子谷の集水配管の修理完了



写真 2 川面も黄葉真っ盛り



写真 3 侵入してネットに足が絡まり転倒するシカ



写真 4 パニックになって右往左往するシカ



写真 5 私の花壇菜園の雑草



写真 6 皆に言われて雑草を抜きました

## 山の実りの大不作？

今年はクマの目撃数が多い。2004年にもそんなことがあったようだ。なぜなのだろうか？山奥に餌になる山の恵みが不足だといわれている。生野でハンザキの調査を始めて36年になるが、クマ情報は数件だった。今年は、生野ダム上流で2件、下で4件もの目撃、食痕情報がある。初めのうちはイノシシと見間違えたのではなどと言われていたが、これだけの数になるとそうではないようだ。特に、ダム下流の場合には4晩連続で庭と山の境に植えてある柿の木が狙われて、直径10センチもの枝が折れていたのを見に行き行って確信した。当法人の事務局員・白滝英雄さんに「次には写真をお願い」と言ったら「ご勘弁を」ということだった。闇の中から“ボキリボキリ”と体重で枝が折れる音には近づき難いものがあるだろう。

そう言えば、構内のアケビはさっぱりだった。クリも例年は毎朝数十個を拾っていたのに、今年は夜の間にはほとんどが小動物に先を越されていた。ハンザキ橋の上流側にオニグルミの大木があり、毎年のように多くの実が道路に転がり、川に落ちてはポチャンという音を立てていたのが今年は全く無い。ヤマブドウもサルナシも駄目だ。ドングリは、昨年10月のキノコ観察会の時には足の踏み場も無いくらいに地面に落ちていたのだが、今年はこれも駄目です。これはドングリの生き残り作戦だと言うことです。ドングリが少ないと小動物が生きていけず減少する、すると翌年には多くのドングリが食われずに残って芽を出すことができるので、ドングリの次世代が生き残れるのだそうです。

.....

## ハンザキ人工産卵巣穴での孵化

人工巣穴で巧く産卵孵化してくれると嬉しい。今年は、8月の調査で昨年10月以来手を加えていなかったのに巣穴の出入り口がいい状態で保たれていた。おまけに15センチ離れた2つの巣穴にオスとメスがそれぞれ入居しているのを確認できた。人の世話を受けなくて良好な状態で人工巣穴が維持できるようになるのが理想だ。熱心な人が管理している間は、その人の世話で巣穴は維持されるであろう。しかし、ヒトは永遠の生き物ではないのでバトンタッチできるか手を加えないでも維持できるようになれば素晴らしい。自然の巣穴でも栄枯盛衰はあって、永久的なものではないのだから人工的にそれを造ることができればいいのだが、これがなかなか難しい。

河川環境は川底と水位の変動が激しく、これに対応するのが課題である。おまけに、水は土砂を運ぶのが使命であり、その結果が素晴らしい海浜を形成することに繋がっている。濁水は土砂を含んでいる流れであり、流れの弱い所に土砂を残していく。それが人工巣穴の出入り口だと埋め立ててしまうことになる。水の流れが来なくては巣穴の前もよどんで水質が悪くなり、ハンザキも寄り付かない。今年は、これがクリヤーでき、12日には千数百匹の幼生を見ることができた。来年も期待したいが・・・



## シカの生き残り作戦

前号でシカの生き残り作戦について少し触れた。今回は、当ニュースNo.45 に登場した網を食い破って侵入しようとして絡まってしまった個体以来1年振りのシカの構内への侵入である。3日午後～5日午前の間、留守にしたら今春に植えたばかりのひよろひよろのリンゴの木3本が丸坊主、おまけに届かぬ所は枝をボッキリ折って綺麗に葉を食われてしまった。その他にもキュウイもやられていた。校庭のあちこちに足跡とフンが多数残されていた。

10日の朝、見周りに出たらフェンスと藪の間から2頭のシカが飛び出して逃げていく。どこから逃げ出すのかと追いかけてみた。パニックになったシカはカラーフェンスに体当たりを繰り返す。2頭とも鼻か口から血を出すほどの突撃を繰り返す。あんな勢いでこちらに体当たりしてこられたらかなわないなと思い、事務局長さんに電話して来てもらった。1頭見えなくなっていたが、カラーフェンス沿いに追って門から出て行ってもらえた。

網は前回同様にミニ・ホールの裏で咬み破られていたので、もう1頭はそこから出て行ったのかと思っていたら、そうではなく校舎の裏側の藪とフェンスの間でウロウロしていた。一人で追い出そうとしても小屋があつたりしてうまくいかない。放置していたが、朝、発見してから3時間も過ぎたのに出て行かない。来合わせたスタッフと3人がかりでやっと追い出した。最初の個体は川の上流へ、あとのシカは下流側へ別れ別れになってしまった。侵入場所は山からの傾斜がゆるく、動物たちの通路になっているようだ。平成17年に白骨化したオスが網に絡まっていた場所でもある。二重三重に網を張り巡らせて、その正面に無人撮影カメラを設置しておいた。どんな動物が撮影できるのか楽しみにしていたが、転んでいるシカが写っていた(写真3)。これまでは、タヌキとネコだけで、あとは人間ばかりが写っていてあまり成果が上がっていないカメラであったが、シカには気の毒だが笑えるシーンである。

校庭の何が食われているのか調べてみた。花壇菜園のダイコン・カブは無事であった。よく食われていたのはヨモギとイタドリで、アザミの仲間にも食痕が残されていた。ネコヤナギとセキショウが全く食われていなかったのは意外だ。今、この近辺の両種は食い減ぼされてしまっているのだが、シカにとっては美味しくないのだろう。また、花壇のホオズキは何物かに食われて無くなっていたのであるが、プールの横とシカの通路になっている河川の土手に群生しているのを見つけたので、シカは食わないのかと思う。それならば、校庭のホオズキを食ったのは何物かということになる。昨年はエダマメを丸坊主にされたがノウサギが犯人だと思っている。ウサギはホオズキを食うのだろうか？ とすれば今年ノウサギがいないのだろうか？ 今年構内で子ウサギを目視しているので、育たなかったのだろうか？ などなどと色々と考えてしまう。いずれにしても、増えすぎたシカ対策を早く手を打たないと日本のフロラが変わってしまう。かわいいつぶらな瞳のシカであるが、同様に増えすぎたヒトとの共存を図るには植林問題を考えねばならないだろう。

## カモガワ・ハンザキにも伝染性？の腫瘍発生！！

今年8月に発生したハンザキの伝染性腫瘍（当ニュースNo.56、写真8参照）は、劇的にイソジンが効き目を見せて収束した。一時は、どうなることかと心配したが、一安心したのもつかの間で再発したようだ。それも前回は全く発症しなかった水の流れの最下流区画に収容されていたハイブリッドたちだ。当初は雑種強勢で病気にも強いのだろうと考えていたのだが、日本産のものと同様に背中中の皮膚がベロンと剥がれているのを見つけた。取り上げてみると剥がれた部分の外側が赤くなっていて同様の症状である（写真7）。水温も下がってきた今頃に再発生とはどういうことなのかと思うが、何しろ原因がまだ解明されていない。とりあえず前回同様にイソジンの塗布と10分間の乾燥を行い隔離した。現在のところ進行は止まり表皮が再生されつつあり（写真8）、食欲旺盛であるのでこれまた一安心ではある。しかし、いつまた発生するのかと気を抜くことが出来ないと思っている。



写真7 発見時の状態 (10月5日)



写真8 治りつつある (11月16日)

.....

## 未成体の原状復帰

2003年生まれと推定できるハンザキ3個体の放流を実施した。保護された時には鰓孔が残っていたり怪我をしていて衰弱していた個体である。数年間水槽で飼育して大きくなり元気になったのでマイクロチップを打ち込んで放流することにした。飼育下で餌を与えられていたハンザキは自然に戻したら餌を取れないのではないかと心配する声が多い。しかし、実際は全く問題なく素晴らしい成長を示した例がある。残りの個体が全てかどうかは確認できていないが、成長がいいのは餌をタップリもらって体力があり瞬発力が大きいからだと思っている。つまり、ハンザキは鼻先に来た物に反射的に大口を開いて丸呑みにする習性があるからだろう。つまり、訓練された“狩り”の巧さではなく単なる反射作用だからだと思う。そうだとすると放された個体は通常の成長以上の速さで大きくなってしまいうのだろうか？ そうなると少々問題があるが、生まれた年の分かっている個体の放流によって寿命が解明されることを期待したいものだ。100年後か150年後かと・・・

ハンザキ研日誌 2010年11月 (GS-308)

- 2日 オオサンショウウオ保護センターの作業場に屋根工事(～3日)
- 3日 グリーンバス(土・日・祝のみ午前午後一便運転)で姫路へ帰宅
- 4日 ・内科・外科廻り(心筋梗塞・高血圧・打撲・捻挫)  
・資材調達
- 5日 ・ビールと共にハンザキ研へ配送  
・校庭にシカが入ってリンゴなど食害されていた
- 9日 福知山市教育委員会より視察の打ち合わせに来所
- 10日 ・朝の見回りでシカ2頭を校庭で発見、追い回すもなかなか出ない(写真4)  
・食い破られていたネットの補修・補強
- 11日 ・京大・吉川博士他、カモガワハンザキ9個体搬入、74個体となる  
・簾野の人工巣穴の孵化確認、幼生13個体搬入
- 12日 ・ハンザキ月例健康診断  
・広島市安佐動物公園・田口博士夫妻来所、魚ヶ滝調査で17個体チェック
- 13日 紅葉狩りトレッキング実施、参加10名
- 14日 ・神戸大学“サイエンス・ツアー”43名とスタッフ5名見学に  
・学生ボランティアなど3名、飛び石整備作業①
- 16日 ハンザキの餌用アマゴ20<sup>kg</sup>納入
- 17日 7歳(2003年生まれ?)のハンザキ3個体、原状復帰
- 18日 水中小型カメラのデモンストレーション
- 21日 学生ボランティアなど5名で飛び石整備作業②
- 22日 宍粟市教育委員会より、来月の視察の打ち合わせに来所
- 25日 生野学園中学生10名、引率5名見学に
- 27日 猪の子谷の集水パイプ修理(写真1)

.....

### ハンザキ所長のツブヤ記録

早くも11月になった。今年は早々に用水系統の凍結対策を実施した。去年は油断をしていて11月に急冷な夜があり、仮設トイレの配管を全て破裂させてしまったのだ。高冷地の生活は、慣れないと色々と失敗してしまう。飼育水槽の濾過槽も水を抜いておかないと凍り付いて破裂させる危険があるので、屋外水槽は冬の間は空っぽにしておく。作業場の屋根も積雪に耐えるように支えを入れてやる必要があるようだ。

13日の紅葉狩りトレッキングで今年予定したイベントは全て終わった。特にトラブルも無く実施できたのは幸いだ。野外活動は天候を始めとして危険な生き物も多く、気を抜くことができない。世間では少しでも危険があれば止めてしまう傾向が強いが、それでは子供たちが可哀想だと思う。しかし、避けることができない場合もある。どうするのか？

(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)